

# いわき市平菅波地区

## 1 想定するモデルとしての姿、モデルとする事項

- 適期の播種、雑草対策等による大豆の収量・品質の安定化を図り、規模拡大を実現する。
- 地域の合意形成で農地集約し、将来的に基盤整備後のブロックローテーションによる大豆の田畑輪作体系を実現する。



## 2 生産概要（中心的な担い手の概要）

- 【作付面積】(R3)水稲：17.0ha、小麦：1.2ha、大豆：無し  
(R7)水稲：20.0ha、大豆：0.35ha

- 将来的に、基盤整備後は2年3作のブロックローテーション（水稲→小麦→大豆）の体系を目指し、R3より麦、R4より大豆の生産を試験的に開始した。しかし、ほ場の区画が小さく、広域に点在しているため、水稲移植作業が遅れ、大豆も作業（特に播種作業）遅れが常態化していた。



▲R7産の大豆

## 3 取組のポイント（モデルとして構築する取組）

### <大豆の適期播種実現と初期生育確保に向けた取組支援>

- 大豆適期播種に向けて、水稲のドローン直播技術のスマート農業技術の導入により水稲移植時間の削減分を大豆播種へ労力投下  
→作業スケジュールの改善により大豆の6月中～下旬の播種が可能となった。
- 排水性の高いほ場選択や額縁明渠、適期雑草対策により初期生育を確保した。

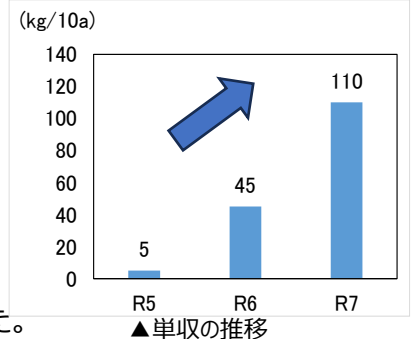


▲R7産の大豆播種

## 4 取組成果

### <大豆の単収向上>

- これまでは、播種時期の遅れにより、生育が確保出来ず、低収量が続いていたが、適期播種による初期生育の確保及び、水稲後作とした田畑輪作や適期除草剤散布による畑地雑草の発生の抑制によって、単収が110kg/10aとなった。



### <作業スケジュールの改善>

- 水稲直播の導入により、作業スケジュール改善され6月中の播種となった。

## 5 残された課題

- R7年産大豆は、作業スケジュールの改善による播種作業や田畑輪作等による雑草対策が行われ収量の向上が見られた。しかし、ドローン防除を実施したにも関わらずカメムシ類の吸汁による被害粒等の汚粒発生が多く（虫害による粒数割合21.5%）、検査等級が特定加工となった。
- 今後の平菅波地区での大豆作では、ドローン等による病害虫の適期防除によりカメムシ吸汁粒等の発生を抑え品質の向上を図る。なお、色彩選別機等の導入による品質向上対策が必要。
- 基盤整備工事が計画より遅れるため、当面の間は、大豆の面積拡大ができない状況にある。しかし、基盤整備事業を見据えて、生産者の大豆生産技術の向上が引き続き必要であるとともに、地域での大豆導入に向けた合意形成を促す活動が必要である。